韓国「子どもの家」における表現活動に関する研究
―実験的実践の試みとヌリ課程「芸術経験」について―

横　井　志　保
鈴　木　方　子

はじめに

韓国では幼稚園教育と保育施設の共通課程であるヌリ課程が５歳児において2012年度から導入された。それに続いて満３、４歳児においてもヌリ課程が拡大され、2013年度より実施されている[1)]。幼稚園教育と保育施設の共通課程導入前から伝統文化の伝承の大切さが謳われているが、[2)] ヌリ課程においても明記されている。伝統文化を大切にすることをヌリ課程において位置づけ、国楽の指導を受けている韓国の子どもたちは、日本の子どもたちとは違った、国楽の影響を受けた表現をするのだろうか。

ヌリ課程導入に関する研究[3) 4)] や伝統文化教育の実践プログラムの検討[5)] や、学校における伝統音楽の学習や打楽器アンサンブル「サムルノリ」導入に関する研究[6) 7)] はなされているが、ヌリ課程と日本の幼稚園教育要領・保育所保育指針との比較研究や幼児期の打楽器に関する実践的な研究は他に見つからない。本研究では、ヌリ課程導入からちょうど１年経った時点での５歳児を対象に、音楽表現に関する内容、殊にリズム楽器を演奏することに焦点を絞り、ヌリ課程「芸術経験」と子どもの表現との関係についてプロセスを追い分析、考察することを目的とする。

研究方法

実践は韓国議政府市の子どもの家２園（P/N）とソウル市の子どもの家１園（S）で2013年２月18・19・20日の３日間各１回ずつ行った。週末に卒園式を控えた５歳児クラスを対象とした。

実践経過を共同研究者がビデオで撮影し録画資料とし、子どもの表現の仕方を中心に分析した。動画は他に園長や来園者も撮影しており、それを補助的な資料とした。

筆者が子どもへの働きかけ、子どもの表現のサポートを一緒に表現しながら行い、言葉はP園では元日本語教師の園長に、N、S園では日本人の通訳に通訳を依頼した。

使用楽器は、プラスチックの音具を中心とし、園に備えられていた子ども用ジャンベやチャング、プク、ソゴも使用した。

表１　３つの「子どもの家」の特徴

	P（民間）	N（国公立）	S（ソウル区立）
定員	48名	98名	68名
園について	市役所近くの町の中心地に近い住宅街の中にあり通園バスで30分以上かけて通う子どももいる	町の北東に位置するが、通園バスを持ち、それで通園する子どもがほとんどである	ソウル市内に位置し、公務員住宅の隣に位置することから公務員の子どもが多く在籍している
表現に関すること	・オルフの外部講師による指導を定期的に受けている ・子ども用ジャンベがクラスの人数分備えられている ・即興的なリズムのやりとりよりリズム模倣がよくできる	・国楽で使用するチャング、プク、ソゴが備えられている ・鍵盤ハーモニカ指導に力を入れている ・キーボードで自由に遊べるコーナーがある ・卒園式では合奏を披露する	・国楽の楽器チャングが備えられている ・国楽は外部講師による指導が定期的に行われている ・英語の手遊びで遊んだり、日本語の手遊びもすぐに覚えることができる

結果と考察

＜実践した「子どもの家」の特徴＞

実践を行った３園の「子どもの家」の特徴とそれぞれ表現に関わる特徴は表３に示した。

＜実践の概要＞

使用したプラスチックの音具は、現地ソウルの雑貨屋で購入した。日本で行う時には音にこだわり、7ℓのポリプロピレンのバケツを使用するが、文化や生活様式の違いからか、韓国では適当な大きさのバケツが手に入らなかったので、よく似た音の出る円筒形のゴミ箱を使用した。他に音色に変化を持たせるために、アルミの入れ物等を使用した。

実践は、保育室、または遊戯室の床に直接座り、実践者を中心として、円形で行ったり、対面で行った。「イヨーッホ!」の活動は立って行った。担任の保育教師や園長が、時に子どもが理解し易い様に、必要に応じて言葉掛けをしながらサポートした。

内容は①実践者と子どもが1対1で音具をたたきながらの音による会話 ②実践者または子どものリーダーによるリズム奏の模倣 ③声と身体でタイミングをとって音を合わせる「イヨーッホ!」の３種類であった。

事例１【音具との出会い】　　Ｐ園　14名

子どもたちにとって音具との出会いは実践者との出会いでもあった。子どもたちは日本語を話す実践者の言葉を理解できないにもかかわらず一生懸命に言葉を聴こうとしていた。実践者が、お互い言葉は理解できないが、私たちは太鼓をたたいて会話ができると言うと、多くの子どもが実践者との音の会話をやってみたいと手を挙げた。実践者がジャンベをたたいて「プク？（韓国語で太鼓の意味）」と言うと、納得した表情をしていたが、音具を持って「これも？」と鳴らそうとすると、「スレギトン（韓国語でゴミ箱の意味）」と数人の子どもが言った。その後実践者がたたいて聴かせた音具の音に、「おぉ！」と驚嘆の声を上げた。音具をたたこうとすると、音を聴く前に「ドンドン」や「カンカン」等と予想した音を口々に言っていた。

韓国では、標準保育課程に依って各クラスまたは園に十分な数の打楽器類が用意されている。筆者はこれまでに音具による実践を重ねてきた[8]が、韓国においては、音具を使わなくても打楽器による表現は十分可能である。筆者がゴミ箱を音具として扱っているのを見て「ゴミ箱」であると言いながらも、音具の太鼓類に似た音を聴き、感嘆の声をあげたり、音具の大きさによって、出る音を予想して言ってみるなど、これまではモノを楽器として扱ったことのない子どもたちも音具を打楽器として認めたと言えよう。またそれらは、子どもらしい素直な表現であった。

音具の使用は、音を気楽に鳴らすことができ、また、誰にでも簡単に音が出せるので楽器の導入として、音具を使用しての活動は有効であろう。

事例２【好きに鳴らすということ】Ｐ園　男児E

音のやりとりで会話する活動で、積極的に挙手をして選ばれた男児E。実践者と同じ音具を選ぶと自分の場所に戻った。実践者が「トントントン」と鳴らすとすぐに真似て鳴らした。Eが鳴らし終わらないうちに実践者が次のリズムをたたくと、Eはまた同じリズムを鳴らした。その後もEの模倣は続いた。実践者がしばらく鳴らさず待っているとEも鳴らさず待った。周りの数人の子どもはたたく真似をしながら「ドドドドドン」などと言い、Eを促すように身振りした。

子どもにとって好きに鳴らすということは、簡単なことのようであるが、この活動の場合、筆者と音のやりとりをするという課題があった。

音のやりとりがスムースにいかなかったことを気にされていた園長はEを「腕白坊主」であると言われた。ここでの「腕白坊主」とは、問われる前から自分の想いを発言してしまったり、十分理解していなくてもやってみたがったり、集中して落ち着いて活動に取り組めないことを指しているようであった。ただ、筆者らはそれを子どもらしいと感じていた。

Eは好きに鳴らすということは理解していたが、即興でリズムパタンを作り出すことに苦慮しており、まだ即興でリズムを作り出す段階にはなく、筆者がEのたたくリズムを受けて、応答するようにたたくが、また繰り返し、それを模倣する段階に留まっていた。Eはリズムパタンのイメー

ジがまだ作れないのであった。

事例３【それぞれのアンサンブルのイメージ】

Ｎ園　男児F

> Fは小脇に音具を抱えると「ワン、ツー、ワンツースリーフォー！」と大きな声でカウントしてから音具を鳴らし始めた。隣の女児はきょとんとしたままだった。

男児Fにはアンサンブルのイメージがあり、それが合図のカウントとして表現された。ロック調のカウントであったが、その後にたたいたリズムは特にロックなどのビートのきいたリズムではなく即興的に作られた拍感がはっきりしないリズムであった。隣の女児には同様のイメージが無かったためカウントは男児のものだけとなり、女児はそれにどう加わって良いかわからず戸惑っていた。このような活動の場合、それまでの音楽経験が表現として現れる。テレビ等で見聞きしたものが、Fにはアンサンブルの始めの合図のイメージとして強く印象に残っていたのであろう。

事例４【タイミングを掴んで人に合わせる】

Ｐ園14名

「イヨーッホ!」の活動は音具を小脇に抱え足を広げて踏ん張り「イヨー」の唱歌と共に腕を広げて準備し、「ッホ!」と同時に打つ。

> 全員で実践者の真似をしながら、「イヨー」でタイミングを計り、息を合わせて「ッホ！」で打ち鳴らした。初めはバラバラであったが、何度かするうちに、子どもたちも実践者の声と動きからタイミングを合わせ、「イヨーッホ！」と唱歌しながら一緒に打ち鳴らした。「ッホッホッホ！」と何度か繰り返して声に合わせてジャンプする男児もいた。

アンサンブルするには、言葉の合図でなく、お互いが息を合わせたり、相手の動きを見ながらそれを感じてタイミングを合わせて音を鳴らす必要がある。この活動は、唱歌しながらではあったが、言葉の通じない者同士が息を合わせるのに最適な活動となった。

事例５【単調なリズム奏】　　Ｎ園　21名

実践終了後、国楽の楽器に交じって筆者の持参した音具も並べられた。普段、保育室で歌っている卒業の歌を合奏して筆者らに聴かせるためである。卒業の歌は保育室のキーボードの譜面台に楽譜が置かれ、子どもたちがいつでも好きな時に演奏できるようになっていた。

> 普段、使用している楽器が音具に持ち替えられただけであるので、初めてとは思えないほど落ち着いて担任の指揮で演奏していた。歌いながら演奏するが、楽器のパート毎で休んだり、打ったりと音の変化や厚みはあったが、そのリズムはメロディのリズムと同じであった。

これまでに、担任保育者と共に行ってきた卒業の歌のリズムアンサンブルだが、楽器によってフレーズ毎に打ったり休んだりメロディと同じリズムで打っていた。音の重なりはフレーズ毎に変化するが、楽器の違いによるリズムの重なりが全くないものであった。

歌いながら演奏する場合、歌詞のリズムと同じリズムを打つことは、子どもにとってとても容易い。また、リズムを決めることなく、子どもに好きに鳴らしてもらうと、言葉のリズムと演奏するリズムが同じになるのは、よく見られることである。また、指導する保育者にとっても無理なく教えられるであろうが、音楽的な表現としてアンサンブルとして成り立っているかは疑問が残る。年長児としてのアンサンブルであるので、音色、音質の変化だけでなく、簡単なリズムの重なりなども感じられるアンサンブルになることが望ましいであろう。

実践のまとめ

実践から以下のことが明らかになった。

1. これまでの生活や音楽する経験からモノの音のイメージや、音楽の型が作られる。
2. 即興で音をやりとりするには一定の段階があるが、模倣が十分でないとそこに留まり、音のやりとりには発展しない。
3. 身体の動きを伴った唱歌「イヨーッホ!」は、アンサンブルする時の相手の息遣いやニュアン

スをキャッチできる、子どもの「感じ取る力」となる。

ヌリ課程「芸術経験」と領域「表現」

ヌリ課程は、身体運動、意思疎通、社会関係、芸術経験、自然探求の５領域から成るが、ここでは、表現活動に関わる領域「芸術経験」を取り上げる。以下の表２は領域の目標と、本研究で対象とした５歳児の音楽表現に関わると思われる領域の内容範疇、内容、細部内容を抜粋したものである。日本の領域「表現」とはどのような違いがあるのか、ヌリ課程と要領・指針を比較して見てみ

表２　芸術経験
【領域の目標と５歳児の音楽に関する細部内容の抜粋[9)]】

美しいものに関心を持って芸術経験を楽しんで、創意的に表現する能力を育てる。
1．自然と周辺環境で発見した美しさと芸術的要素に関心を持って探究する。
2．自分の考えたことと感じたことを音楽、動作と踊り、美術、劇あそびを通じて創意的に表現することを楽しむ。
3．自然と多様な芸術作品を鑑賞して、豊かな感性と審美的態度を育てる。

内容範疇	内　　容	細　部　内　容
美しさを探す	音楽的要素探索	多様な音、楽器等で強弱*、速度、リズム等に関心を持つ
芸術的に表現する	音楽で表現する	歌で自分の考えと感じたことを表現する 伝来童謡を楽しく歌う リズム楽器を演奏してみる 簡単なリズムと歌を即興的に作ってみる
	統合的に表現する	音楽、動作と踊り、美術、劇あそび等を統合して表現する 芸術活動に参加して創意的に表現する過程を楽しむ
芸術鑑賞する	多様な芸術鑑賞	多様な音楽、踊り、美術作品、劇あそび等を聴いたり見たりして楽しむ 自分と他の人の芸術表現を大切にする
	伝統芸術鑑賞	我が国の伝統芸術に関心を持つ

＊表中の波線・二重線は筆者

表３　領域「表現」 音楽に関する部分の抜粋

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
1 ねらい
(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2　内 容
② 保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。〈保〉
(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。〈幼〉
③ 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。〈保〉
(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。〈幼〉
⑥ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。〈保〉
(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。〈幼〉
⑧ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。〈保〉

＊表中の二重線は筆者

たい。

領域「表現」に示されている事項は表３の通りである。‘内容’以外は要領と指針は共通であるので、要領を抜粋し、‘内容’については、音、歌、音楽、楽器といった音楽に関わる言葉が使用されている項目について抜き出し、要領は〈幼〉、指針は〈保〉と文末に記した。また、要領・指針共に年齢による記述はされていないが、ヌリ課程は年齢によって分けて書かれているため、本研究の対象である５歳児のみを比較するものとする。

先ず、「芸術経験」と「表現」の３つのねらいは使用している言葉が違うだけで、ねらいとしている中身にはほとんど変わりがない。どちらも、日々の生活の中で、身の回りの環境と関わりながら、その中で心を動かし、心情を豊かにし、そこで抱いた様々な気持ちを友達や保育者に伝えようと自分なりに表現しようとする意欲を育み、様々な体験を通してイメージを豊かにし、表現することの喜びや表現を楽しむ態度を培うことをねらいとしている。ただ、「表現」では表現する主体的な態度を養うことをねらいとしているが、「芸術経験」では‘審美的態度を育てる’と、美しさについて的確に見極められるような力を養おうとしている点が付加されていることは大きな違いであろう。

また、「芸術経験」には伝統芸術鑑賞という内容がある。「我が国の伝統芸術に関心を持つ」とあり、そういった内容は要領・指針には見当たらない。他に、「伝来童謡を楽しく歌う」とあるが、これは日本のわらべうたに当たるが、表中の指針の内容の②に「保育士等と一緒に歌ったり」と示されており、具体的にわらべうたとは書かれてはいないが、わらべうた等を含んだ歌のことを指しているので、明記されていない点では相違点であるが、内容的には同じといえよう。

その他、多様な芸術鑑賞の細部内容には「自分と他の人の芸術表現を大切にする」とあり、これは要領・指針には見られない。韓国では個を尊重し、遊びのコーナーの決定に見られるように自分で決めることを大切にしているが、個人を大切にするのと同様に他の人の表現も大切にするよう明示されているのであろう。

音楽的環境について

それぞれ、担当保育者の個性もあろうが、各保育室には音楽をするコーナーが設置してある。そこには、「音楽は楽しい」というようなスローガンが掲げられているだけでなく、様々な音の鳴る手作り楽器や、簡単なリズム楽器が用意されている。

写真1　乳児の保育室の音の環境

写真2　3歳児クラスの楽器のコーナー

写真3　5歳児クラスの音楽コーナー

写真4　N園の国楽用の楽器

韓国の保育について

韓国ではアメリカの影響を強く受けており、子どもにあった環境を準備することで子どもを全人的に成長させることができるように援助することを目標とし、「興味領域」というコーナーを設定し、環境構成している。[10)]

コーナーは領域毎にあり、領域を超えて行き来がし易いようにと工夫され配置されていた。（図1）

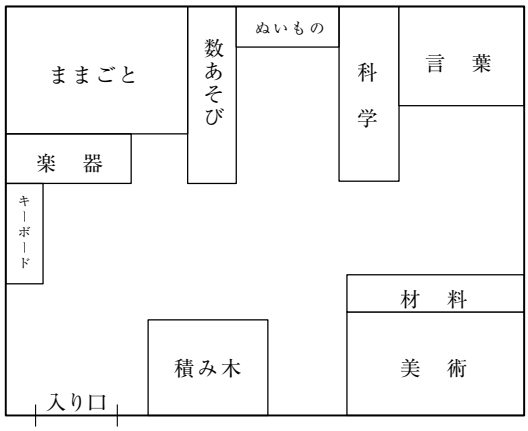

図1　N園5歳児保育室

しかし、各コーナーには人数制限があり、子どもは自分のしたい遊びを朝の集まりまでに自分で決めると、担任の保育教師から指名された順に何のコーナーで遊ぶかを発表する。その後、自分の名札を持ってコーナーへ行き、各コーナーにあるマジックテープで作られている名札の掲示場所に自分の名札を貼り付けてから遊ぶ。人数制限があるため、定員になったコーナーで遊びたい子どもは空くまで待たなければならないが、筆者らの観察中にはコーナーを移動する姿は見られなかった。

保育は好きな遊びを中心としたコーナー保育だけではなく、一斉的な保育もなされ、P園では音楽の外部講師による指導やS園では卒園式に向けた英語劇の練習や国楽の指導、N園でも卒園式に向けての合奏の指導がなされていた。

まとめ

韓国議政府市とソウル市の「子どもの家」における実験的実践の結果と2012年度より導入されているヌリ課程、中でも「芸術経験の5歳児」に焦点を当てて日本の領域「表現」と比較検討してみた結果、以下のことが明らかになった。

韓国では自国の伝統文化を大切にしており、自国の文化を礎に他の文化を取り入れることで、新たな文化となると考えられ、伝統芸術に関心を持つよう指導がなされている。「子どもの家」には西洋の楽器や音楽を楽しむための手作り楽器だけでなく、本物の国楽の楽器が導入され、保育に取り入れられている。日本の和太鼓の導入と似ているが、領域の内容に明記されている点では大きな違いがあろう。ただ、そのことが、子どもたちの表現にどうかかわるかという点においては、音のやりとりにおいて、サムルノリに出てくるようなリズムパタン等の特徴的なリズム等は現れず、普段の保育のそれとは関係が無いようであった。

ヌリ課程芸術経験の目標には「創意的に表現する能力を育てる。」と掲げられているが、本研究では、子どもたちの表現からそれらは認められなかった。それゆえ、今後どのような音楽経験または活動が子どもたちの創意的に表現する能力を育むのか、探っていきたい。

謝辞

本研究のため実践と訪問の調整並びに滞在中お世話してくださった푸른숲어린이집園長李恒榮先生に心から敬意を表し、李恒榮先生をご紹介くださった愛知教育大学企画調整担当中村章二氏、日本と韓国の架け橋になり連絡調整してくださった李ナレさん、また訪問を快く受け入れてくださった園長先生方や実践に協力してくれた子どもたちと担任の先生方に感謝致します。

引用・参考文献

1）安正恩「日本保育学会国際シンポジウム報告資料」日本保育学会第66回大会　2013
2）古市久子他「就学前教育における教育課程の日韓比較研究」大阪教育大学紀要　2002
3）勅使千鶴「韓国における保育・幼児教育の公共性および質の向上への取り組み―「満5歳共通課程」導入の推進計画をめぐって―」日本福祉大学子ども発達学論集　第4号　2012
4）丹羽孝「韓国幼保共通教育課程政策の研究―

3,4,5歳児年齢別ヌリ課程の内容と特徴―」 日本保育学会第66回大会発表要旨集　2013
5）韓在熙「韓国の伝統文化教育に関する研究―幼児保育カリキュラム事例を中心に―」日本教育学会大會研究発表要項　66　2007
6）韓美暎「学校音楽教育における伝統音楽の学習に関する一考察―韓国と日本の中学校音楽教育の比較を通して―」日本学校音楽教育研究会紀要　8　2004
7）田中多佳子「韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化をめぐって―小学校・中学校・高校・大学の音楽科教育における実践的共同研究から―」京都教育大学教育実践研究紀要第 7 号　2007
8）横井志保　梅澤由紀子「子どもが聴き合うたたく活動」日本保育学会第64回大会発表要旨集　2011
9）韓国教育科学技術部　丹羽孝訳 「幼稚園教育課程」2013　日本保育学会国際シンポジウム報告資料　＊筆者修正
10）前掲書　2）
11）文部科学省『幼稚園教育要領』2008
12）厚生労働省『保育所保育指針』2008

付記

本研究は平成24年度保育コンソーシアムあいちの助成を受けて行ったものである。

Research on the Expression Activities in Korea "Nursery School"
— The trial of experimental practice and about "Art Experience" in NURI Curriculum —

Yokoi, Shiho*

Suzuki, Masako**

韓国では幼稚園教育と保育施設の共通課程であるヌリ課程が５歳児において2012年度から導入された。幼稚園教育と保育施設の共通課程導入前から韓国独自の伝統文化の伝承の大切さが謳われているが、ヌリ課程においてもそれは明記されている。日本の領域「表現」に当たるヌリ課程「芸術経験」において、韓国では伝統芸術に関心をもつよう位置づけられ、国楽の指導を行っている。それでは韓国の子どもたちは、日本の子どもたちとは違った、国楽の影響を受けた表現をするのだろうか。

本研究では、ヌリ課程導入からちょうど１年経った５歳児を対象に、音楽表現に関する内容、殊にリズム楽器を演奏することに焦点を絞り、ヌリ課程「芸術経験」と子どもの表現との関係をプロセスを追い分析、考察することを目的とした。

園には国楽の太鼓類、打楽器が十分な数備えられており、日本とは環境が多少違った。また、領域の内容に伝統芸術に関心を持てるようにすることが明記されている点では大きな違いがあろう。ただ、そのことが、子どもたちの表現にどうかかわるかという点においては、音のやりとりにおいて、サムルノリに出てくるようなリズムパタン等の特徴的なリズム等は現れず、普段の保育と子どもの表現とは関係が無いようであった。また、ヌリ課程芸術経験の目標には「創意的に表現する能力を育てる。」と掲げられているが、本研究では、子どもたちの表現からそれらは認められなかった。

キーワード：韓国「子どもの家」，ヌリ課程，芸術経験，表現

**Nagoya Ryujo Junior College*

***Okazaki Women's University*